

Title	国民精神の淵源(村岡典嗣著)
Sub Title	
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.193(573)- 194(574)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

士の反省を求めらるゝ際といふのは、歴史家が史料の蒐集、吟味、整理より進んで人々の内面的な生活、思想の問題に打入らんこと、及び眞に日本精神に目ざめ、先哲の思想を闡明するに至らんこと、是れである。しかし、博士の主張さるゝ日本精神とは何であるかといふことが、本書で明にされてゐない以上、今直ちに博士の意見に賛意を表し難いものがある。

本書に収載された其他の論文に至つては、まだ之を熟讀する機会を得てゐないので、暫く論議を差控へねばならぬが、いづれにもせよ、これらの論文が筆者得意の領域のものであるところを見れば、われらはその内容に十分信を置いて可なりと信ずる。

なほ本書の巻頭に、今は物故された明治史學界の元老達の肖像や筆蹟を挿入してあるのは、これらの人々の功績を表象する意味に於て、然るべき試みであつたと喜ぶと同時に、「その項目において資料の復刻刊行等の業績において、収載すべきである著書・論文の總目において、缺くるところあるを聊か物足りなく感ずる。最後に、已に半世紀の業績を持つ日本の近代的歴史學に、その過去の最初の見透しを與ふべきこの書物を提供して、史學の將來に向つて多くの示唆を投げ掛けられた執筆者並びに編輯者の勞苦を多とし、且つこの種の事業の進展を期待しつゝ筆を擱く。(伊丹榮七郎)

國民精神の淵源 (村岡典嗣著)

本書は、日本思想史の權威、村岡典嗣氏の著はすところである。著者先づ、思想は本來一般的のものであるが、その國々に依つ

て國民思想としての一つの特色といふものがあるといふこと、そしてそれは多くの人が一般的に持つてゐるところの一つの國體觀念であり、古事記の成立の由來とその性質——それは、傳承的性質の書物として編纂されたといふこと、それは又、歴史書でもなければ宗教的・道徳的の經典でもなく、その性質は、極めて素朴單純なものである、といふこと——とが、この國體觀念を導いてゐるのであるといふこと、そして吾々は如何にしてその國體觀念を把握すべきであるかといふと、それは神代傳説の文獻學的解釋に依らなければならぬ、といつたやうな見地から、神代傳説に於ける諸觀念と思想的傾向とを究明し、(その研究の方法にも、その一々の解釋にも傾聴すべきものがあるのであるが、例へば、神代傳説に於ける諸觀念を先づ分拆し、それを更に再び綜合して、そこに思想的傾向を認めんとする方法、神代傳説に現はれたる吉凶相生説、若しくは吉凶二元説とでもいつたやうな一種の辨證法的な考へ方は、單に古代思想としてばかりでなく、極く原始的な哲學思想の一形式である、と考へられるとする解釋の如き)結局神代傳説は、天照大神といふ一大神格に依つて綜合統一されるのであるといふこと、天照大神といふ神格は、現人神としての天皇に對する尊敬の反映と考へねばならぬといふこと、更に現人神として、國家の中心たるべき尊い方であるが故に、宇宙最大の神なる太陽神の子孫であるといふことになるのであつて、これは天皇に對する絶対尊敬であり、一面に於いては、國家即天皇、天皇即國家といふ、天皇至上主義の國家主義を意味することになるといふことを述べ、最後に、主權者と國土とは、神に起源を有すると

いふやうな意味で、國家は統一さるべきものであるといふ、國民精神の一つの理想が、素朴純眞な心持に現はされてゐる、と結んでをられるのである。(古神道は、本來現人神としての天皇崇拜であつて、靈としての天皇崇拜ではなく、これが後に、儒教の影響に依つて、古神道の本質を離れ、道徳的になつて、所謂祖先崇拜的に發達して來たのである。現實主義とでもいつたやうなことも、やはり現人神としての天皇崇拜といふものに結び附いて來る譯である、といはれてゐることに注意すべきである。)

本書は、僅々六十頁の一小冊子ではあるが、吾々祖國の真相を傳へて遺憾なく、著者もいはれる通り、思想問題の對策としては迂遠のやうであり、又實際さうであるかも知れないが、祖國の理解は根本的な問題であるから、本書の如きは、現下の時勢に對して益するところ大であらうと思ふ。(四六判五十八頁、青年教育普及會發行、定價金參拾錢、淺子勝二郎)

リシエ綜合文化史論上卷

(シャルル・リシエ著
間崎万里譯)

シャルル・リシエ氏(M. Charles Richeb)の著 Abrégé d'histoire

Générale: Essai sur le passé d'homme et des sociétés humaine,

1919, 2e éd. 1922. の上卷の邦譯が本書である。先づ構成から見

るに、先史時代からフランス革命直前までの時代が、「先史時代」、

「エジプトと東方」、「ギリシヤ」、「ローマ」、「教會」、「王權」の六

篇に分つて論述されてゐる。第一篇「先史時代」に於ては、舊石器時代、新石器時代、青銅器時代及び鐵器時代と順を追うて人類

生活の進歩を述べ、第二篇「エジプトと東方」に於ては、エジプト人、カルチャ人及びアツシリヤ人、ヘブライ人、フェニキヤ人、新アツシリヤ帝國、メヂヤ人とベルシヤ人の六章に分つて、これ等各民族の歴史と文化に就て述べ、第三・四の兩篇に於ては、それゞギリシヤ史とローマ史を敘述し、第五篇「教會」に於ては、三二二年より一四五〇年に至る時代、即ちキリスト教と封建制度とに由つて主として構成された時代を説き、最後の第六篇「王權」に於ては、一四五〇年より一七八九年に至る三世紀を取り扱ひ、封建制度に代つた西歐の統一的國家や、教會の權威が衰へて科學によつて人類が高度の文明を築くに至つた事實や、又はヨーロッパの歴史から全世界的歴史への發展や、諸國に於ける王權の伸張、殊にフランスに於ける王權の極盛と大革命への進展について論述してゐる。

全卷を通じて、著者はつとめて詳細に史實の説明をほどこし、以て讀者の蒙を啓くと共に、それ等の史實を綜合的に展示して、更に史實の深い意味を理解せしめんことを企圖してゐる。のみならず、著者は更に、年少者に對して正義と不正、自由と壓制、平和と戰爭、知識と無知との判定を示すべき使命の下に、殆どあらゆる史實に對して最も嚴正なる批判を加へ、是非善惡の論を樹つて、以て如何に觀るべきか又は如何に考ふべきかを示してゐる。此の場合著者の採つた判定の尺度は、個人の尊重と科學の信仰と平和主義とである。

著者は人間の歴史を以て、一つの長い殉教者名簿なりと觀る。著者の個人尊重の精神はこれに現はれてゐる。ソクラテスとキリ